

戦後実業界の

風雲児・田中良太



ミシン作業のご説明を受けられる西野下

れた。高等小学校を卒業すると、商人を志し、朝鮮で呉服商を営んでいた伯父を頼つて渡鮮した。それから二十年近くを田中は商人としての修業に励んだのだが、昭和六年、満州事変が勃発し外地での商売が難しくなってきたのを機に今治に帰郷した。

ちょうどその頃、タオル業界は助走期間をすぎ離陸・飛翔していく時期に入つており、大阪産地について、全国二位のタオル生産量を誇るまでに今治はなつていた。その盛況を目の当

たりにした田中良太は、市内の神之木通りに織機二十台を据え、田中タオル工場を始めたのである。

戦時中の一時期は軍の要請で木工所に切り換えねばならなかつたが、戦後は再びタオル生産にもどり、昭和二十一年二月、田中産業株式会社を創立。それを機に彼の事業家としてのエネルギーは爆発するのである。

本業としてのタオルもさることながら、染色工場の設立、起毛会社、証券会社も創立。その他、「ゴルフ場造成のための土地買収、

ボーリング場の経営など、つぎつぎと新規事業に手を染めていった。事業欲に魅せられて猛進する彼の姿は鬼気迫るものがあつたといふ。

タオル関係では、昭和二十八年に中四国タオル調整組合の理事長に就き、織機の登録制度の実施に奔走。そのほか金融機関の協調融資による生産設備の近代化を図るなど、業界の発展に尽くした。

現年八十五歳の田中良太は、「見果てぬ夢」を追いながら昭和六十一年、不帰の客となつた。その田中良太は「見果てぬ夢」を追いながら昭和六十一年、不帰の客となつた。

田中良太は、自宅の応接室でくつろぎながら、義父・良太の想い出話を終止符を打つた。現年八十五歳の田中良太は「見果てぬ夢」を追いながら昭和六十一年、不帰の客となつた。

今治タオルの黄金時代を築いた男



田中良太夫妻

この今治の地において、数多くのタオル会社が存続したが、天皇陛下ご視察の榮誉を賜つたメーカーは楠橋紋織（株）と田中産業（株）の二社をおいて他にない。

その田中産業（株）へのご視察は昭和四十一年で、近代化推進の優良タオルメーカーとしてご視察の対象に選ばれたのである。

社長の田中良太は、自らの出身地である市内・拝志の地に、他社に先駆け、近代的設備を整えた工場を昭和三十四年に建設。その四年後に二

棟ある工場の一棟に最新鋭の自動織機七十二台を導入。全機種を八十五インチの広幅に統一するという、それまでのタオルメーカーとしての常識を打ち破る革新的な決断を行つたのである。

「田中良太は気が狂つたのではないか」との声が同業者から上がるほどに、当時としては破天荒ともいえる経営決断だつた。

それまでのタオルメーカーの経営形態は、小幅織機が主流で顧客からどんな種類（幅）の織物の注文が舞い込んで、即座にそれに対応でき

る」ということが一流メーカーとしての必須条件だったのである。その常識を根底から覆した織機導入だったのであった。それはある種の賭けではなかつたかと思つ。

ところが、その田中の決断が見事に功を奏す結果となつたのである。

昭和三十年代に開発された「タオルケツト」が、見る見るうちに顧客の人気を集め、寝具市場を席巻していったからだ。

三十年代後半では総生産枚数が百万枚だったのが、四十一年には四百万枚、四十二年には五百万枚と破竹の勢いでもつて販売数量が伸び、それから十年間ほどは毎年百万枚増の生産ペースが続いたのだった。

タオル業界始まつて以来の大ヒット商品の出現によって今治タオルは「黄金時代」を迎えたのである。そのケツトの生産に最も適した織機のサイズが、田中良太が導入したハバ十五インチ幅の豊田式自動織機だったのだ。ピーク時には四十万枚を生産したとの記録が残つている。田中産業のタオルケツトは、一頭地を抜いた人気を市場で博し、業界屈指の知名度と信用を得る結果となつたのである。

業界の「風雲児」田中良太は、今治町・拝志村で田中常七の長男として半農半商の家に生まれた。

田中良太は、その事業欲の一端だつた。現在ある県織維産業試験場の敷地二千坪は田中の寄附によるものであるし、他に何千坪という土地を今治市に寄附をしている。彼独自の事業哲学を持つて生きた証であろう。田中産業（株）はそれゆえ今日に至つても「別格」の地位を業界内で保つてゐる。

その田中良太は「見果てぬ夢」を追いながら昭和六十一年、不帰の客となつた。

と、宣興社長は自宅の応接室でくつろぎながら、義父・良太の想い出話を終止符を打つた。

田中産業(株)外観



アガワタオル

タオルが好きなのは、そもそも父の影響だと思う。どなたからいただきものをするならば、「うまい食べ物かタオルが何よりうれしい」というのが父の昔からの口癖だった。父は大きくて分厚いバスタオルを風呂上がりに腰に巻いて出てくるたび、「こういうがつしりたっぷりしたタオルが好きだ」と言う。一方、母と私は多少意見を異にする。なぜならがつしりたっぷり分厚いタオルは洗濯が大変だからだ。水分を吸収するとさらに重くなる。洗濯機はそのタオル一枚で満杯になってしまふ。「まったく使う側の論理だけ言われてもねえ」と母と私はひそひそ囁き合っていた。

しかし基本的にタオル好きの遺伝子はしっかりと受け継いでいる。なにしろ私は中学時代、「アガワタオル」というあだ名を友達につけられたほどだ。人一倍汗つかきなため、少し運動をしたり走ったりするとすぐに顔が赤くなる。そこで「アガワトマト」と命名された。そのトマト色をした顔と流れる汗をとどめるには、洒落たハンカチーフではとうてい間尺に合わず、いつも片手に小さなハンドタオルを握っていた。そこで友達は、「トマトに追加、アガワタオル」と宣言したのである。



エッセイスト 阿川佐和子

●プロフィール

昭和28年、東京生まれ。大学卒業後、和服織物教室に通い、プロの織物作家を目指す。「筑紫哲也NEWS23」「報道特集」等のキャスターを務める。横浜みとの共著「ああ言えばこう食う」で第15回講談社エッセイ賞受賞。作家・阿川弘之氏の長女。

実をいうとその習性はこの歳になっても抜けておらず、今でもバッグのなかに、薄手のハンカチと一緒に、ハンドタオルを忍ばせている。ハンカチは、やや気取った席で必要となった場合に取り出すためである。が、たいていの場合はタオルを使う。お手洗いへ行くとき、汗を拭くとき、あるいは食事をするときのナプキン代わりにもなる。吸水性が高く肌触りの優しいタオルは、そこにあると思うだけで安心する。

そればかりではない。ここ数年、冬の季節になると欠かせないのが、ハンドタオルより大きめの、手ぬぐいサイズのタオルである。

これは風邪防止におおいに役立つ。風邪は首の後ろから侵入すると私は信じている。だから「引いたかな?」と思うが早く、首にタオルを巻く。「引いたな」と実感したあとも、ずっと首にタオルを巻いておく。首の後ろの汗は風邪ビールスの格好のカモであり、ここをタオルで封鎖することが大事なのだ。本当は外出に際しても、マフラーのかわりにタオルを巻いて出かけたいところだが、さすがに「それだけは辞めてください」とアシスタント娘に止められるので、しかたなく玄関でタオルとお別れすることにしている。

空からの訪問者

エドワード・マーレー

太陽ではない何か大きな物が頭上にあると気づいた時、「空が落ちてくる!」ような恐怖に襲われた。

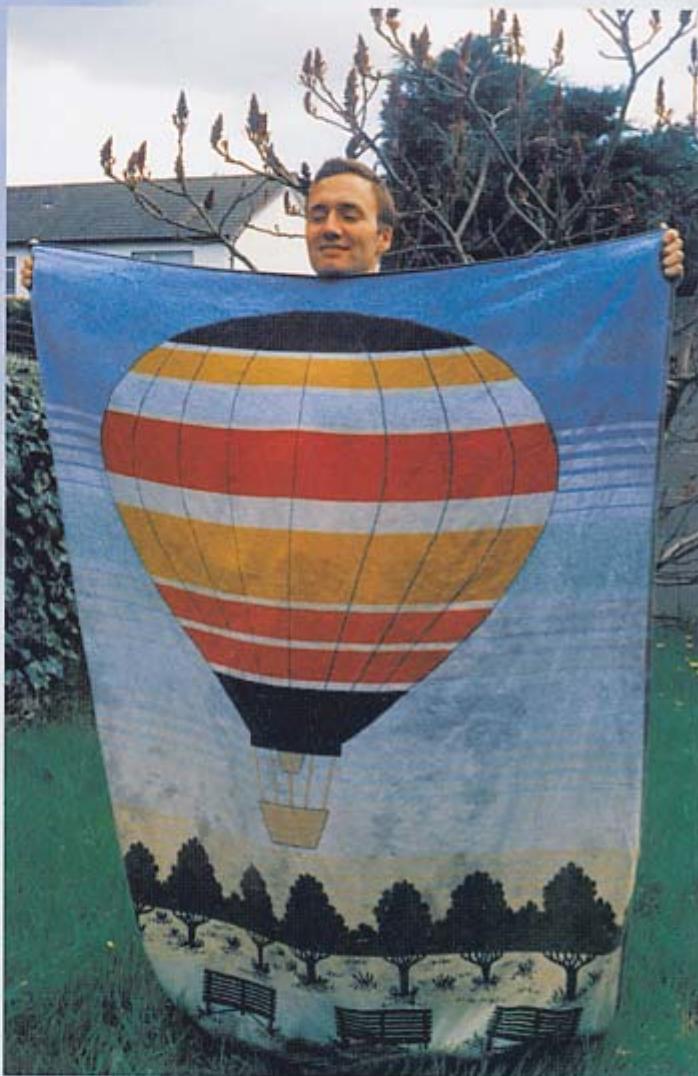
僕はその時五才で、ダブリン山中にある家の裏庭で飛びはねて遊んでいた。現在住んでいるダブリン市内の家庭に比べて、その当時の庭は、僕のような子供にとっては特に、無限の広さに思えた。思うに、その庭は気球に乗って着陸地点を見つけようとしていた人達にとつて、恰好のロケーションだつたに違いない。

頭上の巨大な物体はハイテクらしく、空中にあって全く音を発さず、徐々にまっすぐ降下してくる。五才の僕には空飛ぶ円盤と気球の区別はできなかつた。僕は急いで茂みに隠れながら様子を伺つた。空飛ぶ円盤“がいよいよ地面に近づくと、何かをかぶつた人間らしい頭が見えた。明らかに変装して宇宙人の本性を隠し、僕を安心させようとしているらしい。しかし、それがついにママの生垣をなぎ倒しながら着地した時、いくら僕が熱狂的な宇宙ファンだと言つても、乗組員が地球を侵略しに来た宇宙人

アイルランドのバスタオルは、日本のものよりもかなり大きい。ルクセンブルグほど大きさがなくてはならない。これは故郷でよく言う四角い大きいものに対する例えだが、バスタオルとは横が幼児三人分、縦が二人分以上の大きさのものを言つ。僕は六人兄弟の三番目。ママはいつせいに六人の子供をお風呂に入れた後、僕達人をあの大きなバスタオルでいつべんにくるんで、さつと拭いたものだ。なつかしい子供時代の思い出である。今はもう、くたびれた虹色の気球のタオルを見る度に宇宙人(?)が庭に着陸したファンタスティックでスリリングなあの日のことを思い出す。

生活の中のタオル

海外の暮らし⑥アイルランド篇



ではなく、まぎれもない人間であることが判明した。妙にがつかりしたが、まだ事態がどう展開するか気がもめる。ママは生垣を壊され、僕にとつては大事な遊び場が荒らされたのだから。どうしてくれるんだ?あなたはこの話がタオルと一体何の関係があるのかと思っているでしょう。

この事件の転末は、その後の僕の見せかけストレス性ノイローゼに対する例え

十分な治療費に加えて、彼らはママに大きな虹色の気球が描かれたバスタオルをプレゼントしたのである。

あま の ゆう きち
天野祐吉



- プロフィール
コラムニスト・童話作家。
1933年東京生まれ。博報堂などを経て独立、マドラー出版を設立し、1979年に「広告批評」を創刊。同誌の編集長、発行人を経て、現在はコラムニストとして活躍。主な著書に、「広告みたいな話」「嘘八百」「天野祐吉のCM天気図」など多数。
絵本に、「くじらのだいすけ」「ぬくぬく」「絵くんとことばくん」などがある。

伝統が息を吹き返すとき

森さんが話してくれたいくつかのことが、強く印象に残っている。

当日、森さんは、赤いシルクのジャケットを着て舞台に現れた。それは、タイのシルクで作ったジャケットだという。タイの王室から衣裳デザインを依頼されたりする関係で、タイのシルクのよさにあらためて気づいたそうだが、「タイのシルクには、やはりタイの歴史が、文化が、空気のように織り込まれている」と森さんは言った。

「だったら、伊予紺にも、伊予の歴史が、文化が、空気のように織り込まれている、と言えますね」とぼくが言うと、森さんは「その通りです」と大きくうなずいてくれたのだが、子規博の人たちが伊予紺の制服を着ることで、子規博の中に伊予の空気が満ち満ちていくようになつたら、こんなうれしい」とはないとと思う。それにしても、やはり、森さんの腕はすごい。言うまでもないが、伊予紺ならどんなデザインでもいいというわけでは

ぶり味わつてもらおうという企画で、去年は中村吉右衛門さんやイッセー尾形さんや立川志の輔さんといった人たちに来てもらつて、それぞれの芸を披露してもらつた。

で、その最終回には、ファッショントレーナーの森英恵さんに来てもらつて、「ファッショント」の持つことばについて話してもらつたのだが、この回には第二部として、もうひとつ、面白い仕掛けが用意されていた。

森さんにデザインをお願いしていた子規博の職員のための制服を、ファッショントショー形式で発表したのである。

このショーでは、森さんがデザインしてくれた男性用二着と女性用三着の試作品を発表したのだが、男性用のモデルに中村市長が特別出演してくれたこともあって、会場は大いに盛り上がつた。そのなかのどれかが子規博の新しい制服として選ばれるわけで、それはことしの六月以降に、ぜひ子規博に来て見てもらいたいと思う。

ンピースは、あちこちにある。が、その大半は、空気感がないというか、どこか眠っているような感じがする。伊予の匂いが、香りが、ブンと立ち上がりつゝなのだ。

「その土地の布地に、どう“時代の風”を当てていくか。それが大切ですね」とも、森さんは言っていたが、勝負はまさに、その一点にかかりていると言つてもいいだらう。風の当たる次第で、布地は、呼吸を始めることがあるし、逆に窒息してしまつこともある。

ちなみに、“時代の風”とは、へんに新しがつたセンスや、薄っぺらな流行感覚のことではない。いまという時代のなかで、果敢に生き、果敢に戦つてゐる表現者の、目であり、ことばである。それなしには、古いものが息を吹き返すこととは決してないだらうと、ぼくは思う。

(子規記念博物館館長)

タオルで ひとやすみ



明治27年 四国の今治で阿部平助がタオルを織り始める。
明治28年 夏目漱石が松山中学に英語教師として赴任する。

夏目漱石 「いい湯ですね」
正岡子規 「道後の湯は名湯じゃけんなもし」
漱石 「松山中学の学生は悪戯好きで手こずります」
子規 「学生は蛮カラじゃけん。そんなもんぞなもし」
漱石 「ところでこのタオルすごく気持ちいいですね」
子規 「そりや~、伊予の今治のタオルじゃけんなもし」



明治から平成の今まで、なくてはならぬ家庭の必需品として深く係わりを持つタオルなのに、あまりにも身近で忘れられがちです。

俳聖子規の世界に続くタオルの詩を少しご紹介しながら1枚のタオルが詩の世界では力強く立ち上がり、羽根を広げ、飛び続けているタオルの世界を味わって下さい。

また旅に出る 新しいタオルいちまい

何もしないで ぬれタオル 一枚の涼しさよ 種田山頭火
雨の日は しげれて痛む たなごころ 種田山頭火
タオルに満ちて 小春日の 父清拭す。 道浦母都子
せせらぎに タオル絞りて 汗拭けり 山田みづえ
足なへの 白衣の道路 川水に 田内富美子
タオル浸して 石段拭くも 安藤茂子
笠の下 冷しタオルの 徒道路 武智恭子
バスタオル 産湯の宝 待ち構え 神戸満子
湯上がりの 君にタオルを投げやれば 笑顔のような 富賀のあと。 依万智
一枚の タオルケットを分けあえば つぼみの中の 雌しふへになった 依万智
予されても 目立ちたがりやの 藍タオル 宮崎 弦



(株)今治織維リソースセンター
集積活性化委員長

宮崎 弦

子育ての思い出がいっぱい

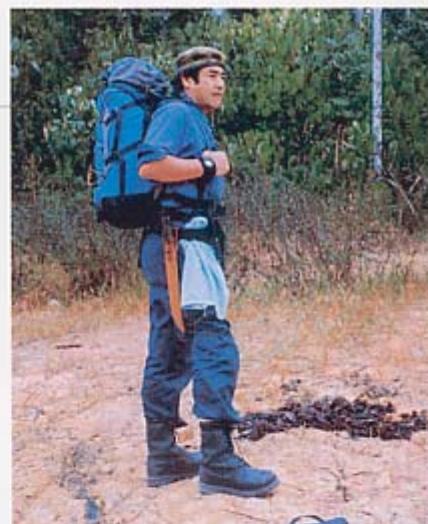


私はタオルのふんわりとした感触が大好きです。肌触りのいいタオルを見つけると、ついつい買ってしまうので、うちの中はタオルでいっぱいです。

子育てにタオルは必需品ですが、私も三人の子どもを育ててきたので、たくさんのタオルを使ってきました。色は、目に優しいバスク調の薄いブルーやピンク、白などが多いですね。タオルには子育ての楽しい思い出や、たいへんだった思い出がいっぱい詰まっています。仕事場で座布団の上にタオルを敷いて子どもを寝かせたり、食事の時のスマックをタオルで手作りしたり…。一日に何枚も何枚も汚しては取り替え、肌触りの気に入つたものは、そればかり繰り返し使いました。ですから、たとえボロボロになっていても捨てら

■プロフィール
1959年東京都生まれ。劇団四季の研究生を経て、映画「夕焼けのマイウエイ」でデビュー。1981年NHKのテレビ小説「本日も晴天なり」のヒロイン役に抜擢された。今治をメイン舞台にした2003年公開の映画「ホーム・スイートホーム2 日傘のきた道」にもマドンナ役で出演した。

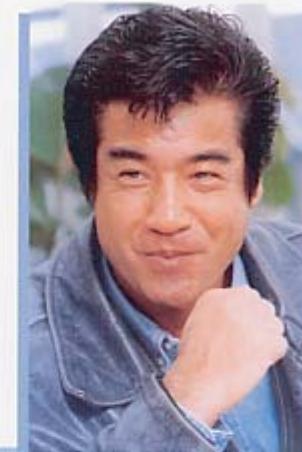
私 と タ オ ル



「テレビ朝日／藤岡弘、探検シリーズ」

かれています。時にはバイル地のタオルだつたり、時には日本タオルだつたり…。また、私は三十年以上前からメンバーと共にボランティア活動に携わっております。今まで、世界十数カ国のかなで、被災地で救援活動を行ってきたのですが、衛生状態がよくなないので、向こうでは顔や体をしようと洗うようにしています。ですから、海外へ行く時にはバッグの中

俳優・武道家 藤岡 弘、



■プロフィール
1946年愛媛県生まれ。65年松竹映画ニューフェースとしてデビュー。主な出演作は『野獣死すべし』『日本沈没』等。TVは『仮面ライダー』『勝海舟』『特捜最前线』『藤岡弘、探検シリーズ』など。柔道三段、拔刀道四段、刀道七段ほか。民間ボランティア団体GRS理事。

タオルは相棒

女優 原日出子

幼い頃から武道をたしなみ、俳優になつてからはアクションやハードボイルドを演じ、国内外でボランティア活動を行つてきた私にとって、「タオルは相棒」というほど、タオルと縁の深い人生を歩んできました。

父は柔道をはじめ、あらゆる古武道の達人で、私は六歳の頃から、実戦武道をたき込まれました。高校時代は柔道部のキャプテンをつとめ、その後も、空手・柔道・拔刀道・日本刀の真剣斬りなどを体得して、日本の伝統文化を伝えるべく、国際的な文化交流のための演武を行つてまいりました。

現在、自宅に道場を持っていますが、タオルは、五十枚～百枚の束で購入します。汗をかいてはタオルで拭き、使い古すとそろぎんとして使い、そして、数ヶ月間で消耗し尽くしているのです。

俳優業の上でもタオルとはきつてもきれない間柄です。仮面ライダーに出演していた頃から、アクションものや漁師役など、体を激しく動かす役柄が多く、汗の似合う男と言われることもあります。テレビドラマ『勝海舟』で演じた坂本龍馬役では、腰にタオルを巻いて闊歩するスタイルを提案したら、それがとても龍馬らしいと評判になつたものです。

現在進行中のテレビ『藤岡弘、探検シリーズ』は、アマゾンや東南アジア、アフリカなどの未開の地を隊長として隊員を率いながら探検する番組ですが、自然と闘いながら挑戦し続ける男である私の首や腰には、いつもタオルが巻かれています。時にはバイル地のタオルだつたり、時には日本タオルだつたり…。また、私は三十年以上前からメンバーと共にボランティア活動に携わっております。今まで、世界十数カ国のかなで、被災地で救援活動を行ってきたのですが、衛生状態がよくなないので、向こうでは顔や体をしようと洗うようにしています。ですから、海外へ行く時にはバッグの中

伊予桜井ぶらぶら歩き

「足跡に咲く花。歴史遺産が語りかけるもの」

旧桜井町は、桜井・国分・古国分・旦・登畠・宮ヶ崎・長沢・孫兵衛作のハケ村で構成された。桜井には、古代・中世・近世・近代と数多くの歴史遺産がある。

当地の歴史を訪ね歩く今、口ずさむ「ダンダンノボレバミヤガサキ!」

伊予国分寺、ここにあり

参拝者で賑わう四国靈場五十九番札所・国分寺の北東数百メートルの地に、数百年という年月、風雪にさらされたままの礎石が存在する。

周辺には田園風景が広がり、民家に挟まれた二十一歩の土地に、奈良時代、聖武天皇の勅願により建立された伊予国分寺の東塔があつた。基段は東西十二・二×南北九・六メートル、高さ一メートルで、十三個の礎石からなり、大きいものは二×一・五メートルもある。

花崗岩の自然石表面には、径五十センチメートル程度の縦形座の柱受けが刻まれ、天平時代の荒打ちのみの痕が鮮やかである。付近の水田からは、蓮華紋の瓦瓦や布目瓦が出土する。

礎石どうしの間隔は約三・六メートルで、一部傾いたものもあるが、この上に約六十メートルの七重の塔が存在したという。残された二十一歩のワ



礎石表面の縦形突起

桜井地区観光スポット



しまがはら つなしきてん まんぐう
志島ヶ原と網敷天満宮

志島ヶ原は燧灘に面する白砂青松の景勝地。約10万平方メートルのエリアに、巨木・老樹のマツがおい茂り、前の海には、比岐島・小比岐島・平市島を望むことができる。ここにある網敷天満宮は次のような社伝を持つ。菅原道真公が太宰府に左遷の途中、暴風にあい、桜井の沖に流された。里人らが船の網を巻いて敷物にして菅公に休んでもらうと、菅公はこれに感謝し、かじの柄に像を刻んで残したという。里人はこれを神像として祀り、網敷天満宮と呼んだといわれる。境内には老松と菅公ゆかりの梅がたくさんある。



さくらいかいのかん
桜井海岸

唐子浜から休暇村瀬戸内東予まで約8キロメートル続く、白砂青松の美しい海岸。平成8年には「日本の渚百選」にも選ばれた。桜井海岸ふれあい広場、桜井石風呂、湯ノ浦温泉などのスポットがある。



さくらいいしふろ
桜井石風呂

その昔、弘法大師が難病の治療に考案したと伝えられている全国でも珍しい天然のサウナ。岩をくりぬき、中にシダを敷き詰めて焼き、その上に海水で濡らしたムシロをかぶせて蒸気を出すと、内部の温度は70度にも。水着のまま入れるので、汗をかいた後は目の前の海水浴場へ。

桜井漆器の繁栄を知る店舗

今治は「月賦販売発祥の地」として知られるが、

そのもとになつたのは桜井漆器の行商であつた。

江戸後期、桜井の地は天領で、紀州黒江(現、海南市)

の漆器を得意とする廻船力をつかって西国方面へ売りさばいた。やがて当地そのものに漆器製造業者が生まれ、明治末・大正期には産地として黄金期を迎えた。



明治初期竣工の漆器卸販賣商店(小谷屋)
明治期は行商用の帆船2隻を所有し、漆器の卸を専業とした。
現在は4代目で製造も行っている。

幻の織豊系城郭・国分山城

二〇〇四年、築城の名手・藤堂高虎が手がけた今治城が、築城四百年祭を迎える。関が原の戦いで活躍した高虎には、伊予国にあつた西軍大名の所領の一つ、今治の地が与えられた。一方、西軍に組したがため、今治の地を奪われる大名もいた。それが、国分山城主・小川祐忠であり、今治では影の薄い歴史である。

一方、現在の住宅地図で桜井一丁目に目を向けると、国道より一本海側の旧道沿いが、実際に奇妙な「御屋敷」の場所は、現在は田畠に使用され、武家屋敷と推定される地域は、古国分一丁目の住宅地である。

今治市都市計画課作成の「今治市小字界図」(昭和六十三年)によると、その対象となる地域には、「御屋敷」「堀内」「中堀」「土手ノ内」「上屋敷」「元屋敷」「古兵衛屋敷」「利石衛門前」らの小字が確認できる。「御屋敷」の場所は、現在は田畠に使用され、武家屋敷と推定される地域は、古国分一丁目の住宅地である。

史上の人物である。

地元で、天子山と呼ばれる唐子山は、賤ヶ岳七本槍の一人、福島正則が伊予に所領を得た際(五八七)、豊臣系大名の証として、これを「織豊系城郭」に改修した場所である。

当時の最先端の築城技術でつくられたこの城は「国分山城」と呼ばれ、山の頂部から唐子浜の海へ向かつて、堅固な防御施設とともに、武家屋敷・町人屋敷がつくられた。中世城郭を脱却し、近世城郭へと移行する「過渡期の城」であつたといえる。



伊予国分寺塔跡
(今治市国分／国史跡)